

# 『長珊聞書』の注釈

— 桐壺卷・葵卷から —

本 廣 陽 子

## 一

陽明文庫に所蔵されている『長珊聞書』は、連歌師長珊の源氏物語の注釈書である。古くは堀部正三氏によつて、『雪月抄』の逸文を含むことが指摘され(一)、その後、伊井春樹氏によつて、『岷江入楚』に「或抄」として引用されていることが明らかにされ(二)、『長珊聞書』は近年注目されている。しかし、一方で、その注釈の内容や性格については、ほとんど明らかにされていない。

そこで本稿では、『長珊聞書』の中から、桐壺卷・葵卷を取り上げて、個々の注釈を考察することによつて、『長珊聞書』の注釈とは具体的にどのようなものなのか、その一端を見てみたい。

## 二

『長珊聞書』を一見してまず気づくのは、多くの注釈書が引用されているということである。たとえば、『長珊聞書』桐壺卷の、桐壺の更衣について述べている次の部分を見てみよう。

### ① 『長珊聞書』桐壺卷

は、君はしめよりをしなへてのうへ宮つかへし給ふへき、は

にはあらざりき

更衣の事 更衣と申はをしなへてのすけ内侍などのごとく

にはあらずかりそめにたちより給ふやうなる所と御説

典侍尚侍<sup>スケツナシ</sup>などになるべき人にてはなき也 種姓すくなき也

職がさたまるをばてんしやうしと云と御説 宗碩聞書

にはされば桐更は大納言の女なれば上宮づかへなどやうに

かるくしくはあるまじきを御寵愛のあまりにかかるくしく

くまづ見ゆるよしにや猶可尋之トアリ

花鳥に礼記に宦学と書て宮つかへし物まなふとよませた

男女の君にいでつかふるをばいづれをしなへて宮づかへ

と云 其中にとり分てすけ内侍などのごとく朝夕御前に祇

候するをば上みやづかへと云 如此心をやりて見れば前後

相違なし 河海に案之桐壺更衣を此卷に或は故大納言いま

はとなるまでたゝ此人の宮づかへのほいかならずとげさせ

奉れといひ又は故大納言のゆいごんたがへず宮仕のほいふ

かく物したりしよるこひはとあり されは宮仕は父の遺命

尤本意の事と聞えたるを今こゝにうへみやつかへし給べき

ゝはにはあらぬといへり 一往は不審あるに似たれとも

再三これを見るに次のことばにあなたがちにおまへさらずも

てなさせ給しほとにをのつかからろきかたにもみえしとあり 女御更衣などは曹司<sup>サウジ</sup>に候て御とのゐにまうのぼるべきに此更衣御鍾愛のあまりおまへさらずあればひたすら宮仕のごとくなるを本意ならずと云歟 をしなへてのうへ宮づかひといへる此心也父の素意は女御更衣の望たる歟 一義云此更衣父なくなりて後はたよりなきによりてなべてうへ宮づかへなと有べきならねと心ばへなだらかにて世のおぼえやむことなしといふ歟 水原抄 (傍線論者、以下同じ。)

傍線部から分かるように、「宗碩聞書」「花鳥」「河海」といくつもの書名が挙げられ、その注釈が引用されている。また、『長珊聞書』に出てくる「御説」は、三条西公条の説であることが、伊井春樹氏によって明らかにされており(3)、三条西公条説が取り入れられていることも分かる。

『長珊聞書』では、『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』『御説』が頻繁に登場する。その他に、今は散逸した『雪月抄』や『宗碩聞書』『宗牧聞書』が引用されたり(4)、『類字源語抄』も引用されている。引用される順番は特に決まっていない。

このように、出典を明記した上での引用がある一方で、出典を書かずに諸注釈を引用している場合が多いのも、本書の特色

である。二つの例を見てみよう。例②は病気の桐壺の更衣を母君が泣く泣く帝に申し上げて退出させるという文について、例③は葵巻の車争いの場面でのことである。

### ②『長珊聞書』桐壺巻

なくくそうしてまかでさせ奉り給ふ

退出のやうを書いて次詞にはいまだ宮中にての事あり此文<sup>フシデイ</sup>舛所々にあり

### ③『長珊聞書』葵巻

大将殿をぞかうけには思ひきこゆらむなといふを

豪家也けんもんぶりするをいふ心なり

例②は『弄花抄』に「退出のやうを書いて次詞にはいまだ宮中にての事有此文体所くにあり」と同文があり、『弄花抄』からの引用とわかる。また、例③も『花鳥余情』に「豪家也 けんもんぶりするをいふ心なり」とあり、『花鳥余情』からの引用である。このように、『長珊聞書』の注釈は、必ずしも出典を明記して引用しているとは限らない。出典が明らかであるもの以上に、多くの注釈を、何らかの経路で取り込んでいる可能性があるのである。

次の例を見てみたい。桐壺の更衣のさまをあらわした「じや

うずめかし」の意味についての注釈である。

④『長珊閑書』桐壺卷

おぼえいとやむことなく上手めかしけれど

上手めかしとは種姓ありがほなり したりがほなる心とも  
云 但したりがほなる儀にはあらず 上らふしきさまなり  
末の詞にも心ばせのなだらかにめやすくにくみかたかり  
しなと恋きこゆるよしあり 花鳥には物の上手は我はとお  
もふ心ある也とアリ

この箇所について、他の注釈書ではどのように記述されているか、いくつか例を挙げる。

『花鳥余情』

物の上手はわれはと思ふ心ある也

『一葉抄』

上臈しきさま也末の詞にも心はせのなだらかにめやすくに  
くみかたかりしなと恋きこゆるよしあり一説したりかほな  
る躰と云々如何

『弄花抄』

上臈しきさま也末の詞にも心はせのなだらかにめやすくに  
くみかたかりしなと恋きこゆるよしなり(論者注:「よしあ  
り」の本文もあり)

『細流抄』『明星抄』もほぼ同文

上ずめかしきとは上臈しきとなり花鳥の説如何

『萬水一露』

閑上らうしきさま也物ことの上手なと我はと思心ある歟又  
したりかほの心もあるにや 細上ずめかしきとは上らうし  
きと也花鳥の説物の上手は我はと思ふ心あるといへりい  
かゝ

『長珊閑書』の傍線部には、「したりがほなる心」の意、「上  
らふしきさま」の意、「我はとおもふ心ある」の意の三種の説  
が提示されている。右に挙げた諸注釈を見ると、『長珊閑書』の  
傍線部は、いずれも当時行われていた解釈であることが分かる。  
最後の「我はとおもふ心ある」の意で解釈する説は、『長珊閑  
書』に記してある通り、『花鳥余情』からの引用である。一方、  
「したりがほなる心」説と「上らふしきさま」説の二説は、古  
くは『一葉抄』で確認できる。このうち、「上らふしきさま」の  
意を表す説はその後三条西家の注釈書『弄花抄』、『細流抄』、『明  
星抄』に継承されるが、「したりがほなる」の意を表す説は取り  
上げられない。しかし、一方で、「したりがほなる」の意での解  
釈は、『萬水一露』の永閑の注釈に、「したりかほの心もあるに  
や」と、見ることができるのである。

つまり、「したりかほなる心」という解釈は、連歌師の間で行  
われていた説であつたのではないかと考えられる。

このように見てくると、『長珊聞書』では、「じやうずめかし」の解釈について、『花鳥余情』三条西家の説、連歌師の間で用いられていた説のいずれをもふまえながら解釈しているということが分かるのである。

さらに、ここでは、「上らふしきさま」と「したりがほなる心」の意を比較し、後者を否定している。ただの注釈集成にとどまらず、長珊の批判的態度が見られる注釈でもある。

例①からも分かるように、『長珊聞書』では、三条西家の説と連歌師の説がしばしば同等の扱いで出てくる。三条西公条の説を「御説」としていることから見れば、長珊の師は公条と思われるが、必ずしも公条説を絶対だと考えているわけではないようである。連歌師の注釈を多く含むのは、長珊自身が連歌師であったからであろう。長珊は、三条西実隆や公条の説のみならず、連歌師達の説をも集成しようとしていたのである。

なお、例④において、初めに提示された「種姓ありがほなり」という解釈は、長珊の説なのか、他からの引用なのか不明だが、意味は「上らふしきさま」とほぼ同じ意味であるので、三条西家の説に準じた解釈である。ここでは、最後に花鳥説も引用するものの、三条西家説を採用していると考えてよい。

### 三

さて、『長珊聞書』の注釈の中には、論者が確認した限りでは、他の古注釈書(5)には見られないものもある。

#### ⑤『長珊聞書』桐壺卷

は北のかたなむいにしへの人のよしあるにて

なんとよみきりていにしへの人のよしあるにておやうちぐしとづけて心うる説あり 但よしあるにてと句をきりておやうちぐしあたりてと世の人の事をいふにてもやすらかに聞ゆるにや云々……

桐壺卷において、桐壺の更衣の母を説明したところである。どこで区切って読むかという問題について、『長珊聞書』では、「なむ」で切る説と「よしあるにて」で切る説の二説を挙げながら、後者の説を推している。この箇所について、諸注釈を見てみよう。たとえば、『弄花抄』『細流抄』『休聞抄』を挙げると以下のようになっている。

#### 『弄花抄』

母北方なんよし有にてと句を切ておや打くしさしあたりてと世の人の事を云にてやすらかに聞ゆる也

#### 『細流抄』『明星抄』もほぼ同文

母北方なんいにしへの人のよしあるにてと句をきりて読也

#### 『休聞抄』

よしあるにて 句を切て親打具しとみる也

『長珊聞書』の注釈の後半は『弄花抄』の注釈と一致するが、前半は『弄花抄』には見あたらない。また、引用した『細流抄』『明星抄』、『休閒抄』だけでなく、たとえば、『孟津抄』、『紹巴抄』『萬水一露』『岷江入楚』にも後半の注釈は引かれるが前半の注釈は一切でてこない。

次の例も例⑤と同様に『長珊聞書』のみに見られる注釈である。

#### ⑥『長珊聞書』葵卷

いかなりともかならずあふせあなればたいめんはありなむ  
おと宮などもふかき契ある中はめぐりてもたえざなればあ  
ひ見るほど有なんとおぼせとなくさめ給ふに

来世にかならずあふべきなど云説あれども其は今病者に心  
なきいひ事也 たゞ夫婦親子の中は契ふかき物なれば不例  
もおこたり給ひて久しくあひ見るほどのありなんと也 猶  
可尋 花鳥には来世には夫婦はゆきめぐりあふ事をいへり  
トアリ 或説 親子の契は一世といひならはしたれ共今は  
なぐさめたる詞なりトアリ

右は、出産間際、六条の御息所の物の怪に取りつかれた葵の

上が、光源氏を呼び、光源氏が葵の上を慰めるところである。

『長珊聞書』の注釈の傍線部は、私見の限りではここに見られる説である。来世で会えるという説を「心なきいひ事」だと否定し、病が治つて現世で長く会うことができる意と解釈する。

この説について、『長珊聞書』は「猶可尋」とし、以下二つの説を引いている。「来世には夫婦はゆきめぐりあふ事をいへり」の部分は、『花鳥余情』に同文が存在し、確かに『花鳥余情』からの引用と確認できる。また、或説として挙げられている「親子の契」以下は、『弄花抄』に同文があり、『細流抄』『明星抄』にも同内容の注釈があることから、三条西家の説であると分かる。

この葵卷の箇所は、親子の契りは一世と言われるが、葵の上と両親は特に前世から深い縁のある仲であるから、また来世でもきつと会えると、光源氏が葵の上を慰めていると解釈するのがよい。そのため最後の三条西家の説が最も穏当な説と言える。とはいえ、『長珊聞書』において傍線部の説を省かず記している点にこそ注目すべきである。例⑤と同様、ほかの注釈書では採られていない解釈も『長珊聞書』には集録されている。

ここに、当時の行われていた解釈のあらゆるものを幅広く集成しようとする長珊の姿勢が見てとれるのではないかと思われる。

そのため、『長珊聞書』からは当時の源氏物語解釈の広がりを

うかがい知ることができるのである。

このことは、次に挙げる例からも見ることができる。

次の例⑦⑧の傍線部は、例⑤⑥の傍線部同様、『長珊聞書』にのみ確認できる注釈である。

⑦『長珊聞書』桐壺卷

いとたい／＼しきわざなり

た／＼しきとは勝事なり大きな大事と云心退々也

宗碩聞書に和秘抄たえ／＼しき也断の字なり いえ五音也

御説にも断の字 河海には退の字とあり 逍遙院殿は断の字にて物をたつ心とあそばされ候

例⑦は、桐壺帝が桐壺の更衣を失った悲しみに沈むあまり、政務を怠りがちであることについて、人々が「たいだいしき」と評したところについての注釈である。他の古注釈書と比較する。

『河海抄』

退々 水原同奥入

此字不審たえ／＼しき歟あいうえおの五音通する也

『源氏和秘抄』

たえ／＼しきと云心也

『弄花抄』

たえ／＼しき也 和抄

『萬水一露』

碩聞退々此字ふしん断／＼しき歟あいうえをの五字通する也

「たいだいし」について、他の注釈書は、たいに退の字を当てるか、断の字を当てるかに終始し、漢字を当てることによって意味を表そうとする。それに対して、『長珊聞書』では、傍線部に見られるように、初めに意味を明確に記しているのである。勝事とは、異常な出来事の意で、奇怪なこと、不吉なことなどについても言う。ここでの「たいだいし」は、あるまじきことである、もつてのほかの意であるから、傍線部の解釈はほぼ適当であると言える。このように、実際のどのような意味なのか、具体的に説明する注釈が見られるのである。

⑧『長珊聞書』桐壺卷

三位のくらゐをくり給よし勅使きてその宣命よむなむかなしきことなりける

……三位のくらゐみつの位いづれもおなし事なれども俊成卿自筆の本にも三の位とある 又古今の仮名序にもおほきみつの位柿本人丸とある 其うへ三位の位はあまり位がちなれはみつの位をもちある みつのくらゐとよむべき歟

或本にはおほきみつの位とある 和秘抄に正三位の事とある 御説にも三位の位とあれどもみつの位とよむ

例⑧は、桐壺の更衣亡き後、從三位の位を贈った記述であるが、その「三位の位」の読みについての注釈である。「みつのくらゐと」以下は「正三位の事也」までは、『弄花抄』からの引用である。他の注釈書ではどのように注されているのか見てみたい。

#### 『弄花抄』

みつのくらゐとよむへきにや或本にはおほきみつの位と有  
和秘抄に正三位の事也<sup>云々</sup>

#### 『細流抄』『明星抄』も同文

三つのくらゐと読也

#### 『萬水一露』

碩みつのくらゐとよむへき也河内本にはおほきみつのくらゐとあり又文字のまゝ三位とよむもくるしからざる歟 和秘抄おほきみつのくらゐ正三位なり 細みつのくらゐとよむ也

いずれの注釈も、「三位の位」をどう読むのかを書くのみで、なぜそう読むのか、その理由を説明したものはない。それに対して、『長珊聞書』では、傍線部のように、なぜ「三位の位」を「み

つのくらゐ」と読むのか、詳しい説明が見られるのである。

前記の例⑤⑥では、他の注釈書では採られていない説を、積極的に集録するという長珊の注釈態度が見られた。この例⑦⑧からは、さらに、より分かりやすくより具体的な注釈を積極的に取り入れようとする態度が見て取れるのではないだろうか。

#### 四

本稿で取り上げた例以外にも、『長珊聞書』の中には、他の注釈書には見られない、おそらくは他の注釈書ではそぎ落とされてしまった解釈や説明を、随所に見つけることができる。

三条西家の説、連歌師の説を問わず採録し、また、講釈の聴聞やさまざまな場で知り得た説を、広く取り込もうとした長珊の注釈態度こそ、この『長珊聞書』を現存している他の注釈書とは違ったものにならしめていると思われるのである。

『長珊聞書』の注釈の特色を明らかにするためには、さらなる検討が必要であるが、それは別稿に譲りたい。

『長珊聞書』の引用は、陽明文庫蔵『長珊聞書』による。文の切れ目などに一字分あげ、読みやすいようにした。濁点・ふりがなが付された所は原本のままとした。

他の古注釈の引用は次の通り。

・『河海抄』…玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』角川書店 昭和四三年

・『花鳥余情』…中野幸一編『花鳥余情 源氏和秘抄 源氏物語之内不審条々 源語秘訣 口伝抄』(源氏物語古注釈叢刊第二卷) 武蔵野書院 昭和五三年

・『源氏和秘抄』…中野幸一編『花鳥余情 源氏和秘抄 源氏物語之内不審条々 源語秘訣 口伝抄』(源氏物語古注釈叢刊第二卷) 武蔵野書院 昭和五三年

・『一葉抄』…井爪康之編『一葉抄』(源氏物語古注集成第九卷) 桜楓社 昭和五九年

・『弄花抄』…伊井春樹編『弄花抄 付源氏物語聞書』(源氏物語古注集成第八卷) 桜楓社 昭和五八年

・『細流抄』…伊井春樹編『内閣文庫本 細流抄』(源氏物語古注集成第七卷) 桜楓社 昭和五五年

・『明星抄』…中野幸一編『明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄』(源氏物語古注釈叢刊第四卷) 武蔵野書院 昭和五五年

・『休閒抄』…井爪康之編『休閒抄』(源氏物語古注集成第二二卷) おうふう 平成七年

・『萬水一露』…伊井春樹編『萬水一露』(源氏物語古注集成第

二四卷) 桜楓社 昭和六三年

〔注〕

(1) 堀部正二「鎌倉末期の古註『雪月抄』逸文について」『中古日本文學の研究 資料と實證』教育圖書 昭和十八年

(2) 伊井春樹『長珊聞書』と「御説」『源氏物語注釈史の研究 室町前期』(桜楓社 昭和五五年) なお、『長珊聞書』の成立や概要はこの論文に詳しい。

(3) 注(2)に同じ。

(4) 散逸した『宗碩聞書』『宗牧聞書』が引用されていることは注(2)の伊井氏の論文で注目されている。

(5) 論者が確認した他の古注釈書は、『源氏釈』『奥入』『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』『一葉抄』『尋流抄』『弄花抄』『細流抄』『明星抄』『休閒抄』『紹巴抄』『山下水』『覺勝院抄』『孟津抄』『萬水一露』『岷江入楚』『湖月抄』である。以下、同じ。

財団法人陽明文庫文庫長名和修先生には、貴重な所蔵資料の閲覧に際し、ご高配賜りました。心より御礼申し上げます。

本稿は、陽明文庫における古典資料研究会(平成一八年)及び二〇一一年度第一回伊勢湾・熊野地域研究センター研究会の口頭発表の一部をもとにしたものです。

〔もとひろ・ようこ 本学教員〕